

# *Billy Budd* における艦長 Vere の 裁きにみられる悲劇

倉 橋 洋 子

The Tragedy of Captain Vere's Judgment  
in *Billy Budd*

Kurahashi Yoko

## 序

Herman Melville の *Billy Budd, Foretopman* (1924) は、18世紀末にイギリスの軍艦内で起こる事件が中心となり展開されている。この作品に関して、これまで種々の解釈がなされてきた。それ等は次のように大別される。最も広く認められているのは、この作品を Melville の “Testament of acceptance” であるとする解釈。次は、上記の見解に対する反動で、Melville は神と対立しているとする解釈。あるいは、Billy は上官を殺した罪により死刑になるが、彼の犠牲はこの世に善を回復したのであるから、彼は勝利を得たとする解釈。その他、この作品は、現実と理想との相違から生じる古典的悲劇であるとする解釈。さらに、Charles A. Reich の、この作品は法、社会と自然人との根本的対立を描いているとする解釈。これらの解釈は、いずれも高く評価されるべきものであるが、Reich の指摘している法、社会的な面に視点を置いて考察すべき問題が、*Billy Budd* には存在すると考えられる。

Melville (1819—91) は、晩年の1891年に、*Billy Budd* を書き終えた。それより少し前の1884年に、難破船にまつわる実在の事件が、イギリスの法廷に持ち込まれている。ところで Melville は、1839年初めて商船の水夫として航海し、1841年には、最初の捕鯨船に乗って南海へ向ったが途中脱走し、1843年にアメリカの軍艦に水兵として乗り組み、翌年帰国した。この間に蛮人との生活、捕鯨船内の暴動、そのための投獄等を経験した。このような経験の持主の Melville にとって、イギリスの難破船にまつわる事件は、興味を引くものであったであろう。

イギリスの実在の事件は、その状況が非常に *Billy Budd* の状況に似ている。*Billy Budd* の執筆に当たり、イギリスの事件は、Melville にとって一つの好材料となったと考えられる。*Billy Budd* とイギリスの事件とを比較することにより、この作品の解釈を本論において試みる。

## I

*Billy Budd* の一素材となったと考えられるイギリスの法廷に持ち込まれた事件は、当時、世間を騒がせた大事件となり、法にとっては一つのジレンマとなる事件であった。事件の概要は次の通りである。<sup>1</sup>

イギリスの三人の水夫と、17、8才のイギリスの少年が、希望峰から1600マイルの所で難破してボートに移った。彼等は持っていた食料と、捕獲した物を12日目に食べ尽してしまった。18日目に三人の水夫は、自分達には家族があることを話し、今にも死にそうな少年を翌日までに助けの船が来なければ殺す決心をする。翌々日の20日目に助けが来なかったので、三人のうちの二人が、神の許しを請うてから少年の喉にナイフを刺して殺した。三人は少年の血と肉をむさぼり、その4日後に衰弱しきった状態で救出された。その後少年を殺した二人は、殺人の罪で告訴された。

事件の判決は、最高裁判所長 Coleridge 卿に委ねられた。裁判において、少年殺害時には、救助船が来る可能性もなく、少年を食べていなかったら、全員、救出前に死んでいたであろうし、少年が一番最初に死んでいたであろうことは認められた。弁護側は、この状況の下では、殺人とは言えないと論じた。しかし Coleridge 卿は、正当防衛以外の殺人は、正当性がないとし、次のような理由をあげてこの弁護を却下した。

戦争、あるいは難破の場合、自己の生命を維持することは義務であるが、生命を犠牲にすることが、最高の義務でありうることもある。また、生命の価値を力の強さ、知力等で決めると、抑制力のない情熱と残忍な犯罪を法律的にかばうことになる。生命の価値は、社会的地位能力等に関係なく万人平等である。人は誘惑に負けるからと言って、その誘惑を弁護する権利はなく、犯罪者への同情から犯罪の法的定義を加減することは許されない。法は法である。法が個人に厳しすぎ、同情の余地があると考えられる時は、憲法に規定されているように、陛下の赦免権発動におまかせすべきである。

被告の二人は、死刑の宣告をうけたが、嘆願により、女王は死刑から禁固六か月に減刑された。死刑の判決を下した Coleridge 卿は、哲学者や、法学者達の意見を参考にして、学究的見解の下に、死刑を宣告した。Coleridge 卿が多数の学者の意見を参考にした背景には、裁判に対する個人的同情と、社会的規範の遵奉との間のジレンマが存在したと考えられる。

## II

このイギリスの事件の Coleridge 卿の判断と、Billy の殺人の事件の裁判官となった艦長 Vere の判断とを比較してみる。それにより、Melville の考えを艦長 Vere の判断の中に読み

1 Charles A. Reich, "The Tragedy of Justice in *Billy Budd*", *Yale Review*, 56 (March 1967).

取ることを試みる。これを検討するに当たり、Billy の事件の内容を次に見てみよう。

事件は、1979年の夏のことである。艦長 Vere は、前任衛兵伍長の Claggart から、新兵の前檣楼兵である Billy が反乱を企てていると聞かされる。つまり、Billy はイギリスの商船、*Right of Man* から彼等の軍艦 *Indomitable* に徴用されてきたことを恨み、反乱を計画しているというのである。これを聞いた艦長 Vere は Claggart と Billy を対決させる。Billy は興奮すると吃る癖があり、この吃りのため彼は上官の Claggart の告発に応酬することができず、艦長 Vere の前で思わず Claggart に一撃を与え、彼を殺してしまう。事件の現場に同席していた唯一の第三者として、また、軍艦の最高責任者として、艦長 Vere は事件を処理しなければならない立場に置かれる。

艦長 Vere は、読書家で十分な知性がある。彼は Claggart と共に、純粹無垢な Billy に代表される“moral phenomenon”<sup>2</sup> の理解者の一人である。Claggart は情に欠けるが、理性に富んでおり、Billy は理性に欠けるが、情に富んでいる。しかし、艦長 Vere は理性も情も十分に備わった人物である。Billy の事件の処理をする人物としては、艦内の中では妥当な人物であると考えられる。そのような艦長は、Claggart の死を確認した時、“It is the divine judgment on Ananias! Look!”<sup>3</sup> と語る。また、彼は Billy の吃りにも気付いており、吃りのために Billy が意図的ではないが、Claggart を殺してしまったことも認識している。

以上のことから、艦長 Vere の事件の処理の選択は、次の四種類が考えられる。第一は、Billy が Claggart を殺した時、現場には Billy、Claggart、艦長 Vere の三人以外、誰も同席していなかったために、艦長 Vere の判断で事故として処理すること。第二は、臨時軍法会議を開かないで、この事件を提督に委ねること。第三は、軍法会議を開いても、死刑の判決を下さず減刑すること。第四は、軍法会議により Billy に死刑の判決を下すことである。

以上、四種類の選択が考えられるが、Melville は、これらの選択の余地を艦長 Vere に与えていないように考えられる。艦長 Vere は、Claggart の死を確認した軍医に、とっさに次のように叫ぶ。“Struck dead by an angel of God. Yet the angel must hang!”<sup>4</sup> 艦長 Vere は、Billy が人を疑うことを知らない無垢な性質で、誰からも愛されている“angel of God”であると認識している。しかし、一方では罪は罪でまぬがれないと彼は判断し、Claggart は事故死であるとする第一の選択を除く。

軍医を始め、事件を知った大尉達は、事件の判断を提督に委ねるべきであると考え。また艦長 Vere 自身もそうしたかったと述べている。しかし、Billy の事件が起ったのは、イギリス海軍にとって重大な Nore の反乱事件（1797年5月にテムズ川の河口の砂州に停泊していた軍艦内に起った反乱）の二、三か月後の夏である。Billy が上官を殺したということが引金と

2 Herman Melville, *Billy Budd, Foretopman, Selected Writing of Herman Melville* (The Modern Library, 1952), p. 845.

3 *Ibid.*, p. 869.

4 *Loc. cit.*

なり、Noreの反乱のように、新たな暴動が起こることを心配した、軍人として責任感の強い艦長 Vere は、決断を急ぐ。このようにして第二の選択も放棄される。

臨時軍法会議の席上、将校が、Claggartは何故悪意ある嘘を付いたのかと尋ねると、次のように、艦長 Vere は答える。

Quite aside from any conceivable motive actuating the Master-at-arms, and irrespective of the provocation to the blow, a martial court must needs in the present case confine its attention to the blow's consequence, which consequence justly is to be deemed not otherwise than as the striker's deed.<sup>5</sup>

殺人の意図があったかどうかは、艦長 Vere によると問題でなく、Billy が上官を殺したという行為の結果のみ軍法会議では問題になっている。また、大尉に刑の軽減について問われると、艦長 Vere は次のように答える。“Lieutenant, were that clearly lawful for us under the circumstances consider the consequence of such clemency.”<sup>6</sup> 彼は、刑の軽減は合法的でないと考え、またその恩情の結果が人々に悪影響を及ぼし、反乱へとつながることを恐れる。このように、第三の選択も放棄される。

軍法によれば、上官を殺すことは、死刑に値する重大な罪であるため、艦長 Vere は、軍艦の艦長であるという社会的責任上、第四の選択の死刑を選ぶ。

Billy の事件は、極限状態に置かれた前述のイギリスの实在の事件と状況が似ている。少年を刺殺した二人の行為は、彼等の生命を維持するためには、あの状況の下ではやむを得なかった。Billy もあの精神状態では自然のことである。艦長 Vere は、精神異常者でもなく、冷酷な法律の番人でもない。彼も他の大尉達と同様に、Billy に対して同情心を抱いている。しかし、艦長 Vere は Coleridge 卿と同様に、犯罪者への同情から犯罪の法的定義を加減することは許されないという判断をする。従って、情状酌量の環境説は切り捨て、死刑の判決を下す。Coleridge 卿の表現を再び借りれば、「生命の価値は力の強さ、知力等で決められない」のである。ここで Melville は、生命の価値に関する彼自身の考えを、艦長 Vere に代弁させているように考えられる。即ち、イギリスの事件において、少年が瀕死の状態にあるからと言って、また、Claggart が邪悪な人物であるからと言って殺されて当然な理由はないのである。

### III

ところで、イギリスの实在の事件において、二人の水夫が少年を殺したのは、彼等が極限状態に追込まれた結果である。海上のボートの上で彼等は、食料がなく、いつ救助の舟が来るといってもない。彼等が手を下さなくても、少年は死ぬであろうと彼等は判断した。死を目前

5 *Ibid.*, p. 876.

6 *Ibid.*, p. 882.

にした彼等は、自己の生命を必死に維持したのである。即ち、彼等は人間の本能、つまり、自然さに従ったのである。上官の Claggart を殺してしまう Billy もイギリスの水夫達と同様に極限状態に追込まれ、その結果、人間の本能、自然さに従うのではあるまいか。

ここで、Billy が殺人を犯してしまうことになった原因を彼の側から調べてみよう。Billy の事件の直接の原因は、彼の吃りにあるが、間接的な原因は、彼の性質にある。多くの批評家に Billy は墮落する以前の Adam であると言われているが、彼の性質は次のように表現されている。

For the rest, with little or no sharpness of faculty or any trace of the wisdom of the serpent, nor yet quite a dove, he possessed that kind and degree of intelligence going along with the unconventional rectitude of a sound human creature, one to whom not yet has been proffered the questionable apple of knowledge.<sup>7</sup>

Billy は、無垢な人間とうまくやっていけるが、墮落した世界の人間とうまくやっていけるだけの “intelligence” に欠けている。つまり Melville が、“innocence” は多かれ少なかれ “intelligence” に欠けていると語っている<sup>8</sup>ように、Billy は、人間の持つ善と悪の二面のうちの悪の面の存在を理解する “intelligence” に欠けている。従って、老水夫の Dansker から Billy は、Claggart の中傷について忠告されるが、人を疑うことを知らない無垢な性質で、“intelligence” に欠けているため、Claggart の邪悪な面を予想すらできない。

さらに、Billy は Claggart が彼に対して妬を持つ原因となる美德について、自分自身気付いていない。次のように、彼は自意識に欠けているのである。“Of self-consciousness he seemed to have little or none,…”<sup>9</sup> 即ち Billy は、自分自身の美德についての自覚と悪を理解する “intelligence” に欠けているため、Claggart の策略を推測し、事前に知的に防衛し、事件の発生を防ぐことができないのである。

以上のような Billy が、艦長 Vere の前で事実無根の反乱について Claggart に告発される時、それを彼は、予想すらできなかったため、彼は驚き、興奮して言語障害に落ち入る。言葉により弁解することができない Billy に残された唯一の方法は、腕力に訴えることである。Billy が思わず Claggart に一撃を与えてしまうのは、自己防衛の本能に従った自然な行為である。結局、無垢な Billy が Claggart を殺してしまうのは、イギリスの難破船の水夫達と同様に、極限状態に追込まれた結果である。

ここにおいて、墮落以前の Adam のようであった Billy は、この罪を犯すことにより墮落したことになる。Billy の吃りは、この墮落の直接の原因である。Melville は Billy の吃りを

7 *Ibid.*, p. 817.

8 *Ibid.*, p. 854.

9 *Ibid.*, p. 817.

次のように説明している。

Though our Handsome Sailor had as much of masculine beauty as one can expect anywhere to see; nevertheless, like the beautiful woman in one of Hawthorne's minor tales, there was just one thing amiss in him. No visible blemish, indeed, as with the lady; no, but an occasional liability to a vocal defect.<sup>10</sup>

Melville は、親しい交際のあった Hawthorne の作品の “The Birth-mark” の美しい Georgiana の唯一の欠点である頬のあざを引合に出して、Billy の欠点を説明している。Georgiana のあざは、“fatal flow of humanity”<sup>11</sup> とか、“symbol of imperfection”<sup>12</sup> と表現されている。つまり、吃りはあざと同様に人間の不完全さ、原罪を象徴していると思われる。言いかえれば、人間は極限状態に追込まれた時、本能的に行動しやすい。それが人間の自然さであり、それに従って行動することにより時には罪を犯すことになる。いかに、純粹無垢な Billy でも罪を犯してしまうのはそのせいである。それが、Billy の場合には吃りに象徴されているのである。

#### IV

イギリスの難破船の少年は、極限状態に追込まれた他の人々によって殺されたという点において、Claggart と同じである。しかし少年は、彼を殺した二人の水夫達を悪意に満ちた行為により極限状態に追込んだわけではない。少年が殺された原因を彼の側に捜せば、それは、彼には多分家族がなく、彼自身瀕死の状態にあったという点にすぎない。ここで再び、Claggart が死に至る原因を彼の側から調べてみよう。Claggart の場合は、少年の場合と異なり、彼が死に至る積極的な原因が彼自身にある。

Claggart は海軍に入った時には、あまり重要と思われない任務についていたが、優れた能力を発揮し、また上官にとり入り、突然先任衛兵伍長の地位についた。彼は知力があり、抜けない人物である。また彼は、Billy に対する憎しみを彼の面前では隠し、優しい言葉を彼にかける偽善者でもある。

即ち、Claggart は Melville の言葉を借りれば、“Natural Depravity: a depravity according to nature”<sup>13</sup> の性質を持って生まれた人物である。そのような人物は、狂気を帯びた目的達成のためには、賢明で冷静な判断を下す。生来の悪の性質を Claggart は隠すことはでき

10 *Ibid.*, p. 818.

11 Nathaniel Hawthorne, “The Birth-mark”, *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne* (Ohio State University Press, 1974), X, 38.

12 *Ibid.*, p. 39.

13 *Melville*, op. cit., p. 842.

るが、それを消滅させて、善に傾く程、力はない。皮肉なことに Billy に代表される “moral phenomenon” を十分に知的に理解できる二人目の人物が Claggart である。彼は、Billy の無垢な性質を理解できるが故に、妬を感じる。しかし、時には Billy の無垢を軽蔑する気持が生じる。結局 Claggart は、Billy に対して、“envy and antipathy”<sup>14</sup> を抱く。これを引金とし、“Natural Depravity” の性質を發揮して、Claggart は Billy を陥れるために陰謀を企むのである。

Claggart が Billy に妬を抱くのは、人間の悪の面の自然さである。Billy の純粹さは、人間の善の面の自然さであり、彼の Claggart への暴力は、悪の面の自然さである。善悪二面のある人間の自然さの、悪の面の代表のような性質の Claggart は、善の面の代表のような性質の Billy に策略をめぐる。その結果、Billy を極限状態に追込み、Billy の悪の面の自然さを引出したために、意図的ではないが、彼に殺されるのである。

## V

最後に、Billy に死刑の判決を下した艦長 Vere の心理状態について考察してみよう。艦長 Vere が、Billy に有罪の決定を告げ、Billy を胸に抱く時、あたかも、Abraham が神のお告げを守るために息子の Issac をいけにえとして神に捧げる時の姿に似ている。<sup>15</sup> この Melville のたとえば、艦長 Vere と Billy との関係を説明している。艦長 Vere は、Abraham のように、Billy に対して父親としての感情を抱いているが、新たな反乱の恐れ、遵奉のことを考慮したならば、一種のいけにえとして、Billy に死刑の判決を下さざるを得ない立場にある。

Billy に判決の結果を告げた後の艦長 Vere の顔には、“agony of the strong”<sup>16</sup> が浮かぶ。弱者に対して強者の立場を取らざるを得ない人の悩みが浮かんでいたのである。Melville は、それを次のように述べる。

That the condemned one suffered less than he who mainly had effected the condemnation was apparently indicated by the former's exclamation in the scene soon perforce to be touched upon.<sup>17</sup>

艦長 Vere は、Coleridge 卿と同様に、社会的責任と Billy に対する同情との間のジレンマで悩む。即ち、艦長 Vere のジレンマは、人間の墮落性という自然と、軍人として法律に従うことの当然さ、社会的道徳との間のジレンマである。

社会規範の圏外に住む動物ならば、事件は、力の強い者の勝利に終る。しかし、人間は、社会規範の法律を守らねばならない。艦長 Vere は、理性も情も十分備わった人物であるため、

14 *Ibid.*, p.844.

15 *Ibid.*, p.885.

16 *Loc. cit.*

17 *Loc. cit.*

人間の自然さを認識しているが、社会規範をも守る人物である。そのような彼は、Billy の事件において、人間の本能の自然さと社会的道徳との選択の問題で悩むのである。

結局、Melville は、艦長 Vere に社会の方を選ばせているが、自然と社会との問題の解決はこの作品においてはあいまいである。Billy は、死刑の時、“God bless Captaiu Vere!”<sup>18</sup> と叫んでいる。これは、彼が艦長 Vere の選択を受け入れたかのようである。あるいは、これは、Melville 自身の言葉のようである。しかし、一方艦長 Vere は、死際に、“Billy Budd, Billy Budd.”<sup>19</sup> と叫んでいる。この言葉から判断すると、艦長 Vere が、彼の選択に対して疑問を抱いていたのであろうと推測される。イギリスの Coleridge 卿の事件は、裁判では死刑の判決が下ったが、嘆願により、女王は死刑から禁固六か月に減刑された。Melville は、実在の事件のように、作品の中では、減刑を認めていないが、艦長 Vere の死際の言葉により、社会規範の中でどこまで人間の自然さを認めるかを定めることの困難を示している。

ところで、前述の Hawthorne の “The Birth-mark” において、Georgiana のあざは彼女の死と共に消える。Billy もまた、死と共に吃りから解放される。彼等は、死により各々の欠点、即ち原罪から解放される。言いかえれば、彼等は、生きている限り、原罪から逃れられないのである。ここに、Hawthorne の原罪感が、Billy の吃りの中に読み取れる。

Hawthorne は、彼の作品において、罪を犯す人間を、救われる人間と救われない人間とに区別している。許し難い罪を犯し、救われない人間は、たとえ罪が公にならなくても、あるいは、社会規範の法律において罰せられなくても、人間社会とのつながりが断たれ、孤独な状態に陥る。Hawthorne は、人間社会とのつながりを重視し、それを断たれたならば、人間が幸福になれないと考えている。しかし、彼の場合、罪の問題は社会規範の法律に従って判断されていない。それは、人間の良心に従って判断されているのである。Melville の *Billy Budd* においては、罪の問題は法律に従って判断されねばならない状況にある。

Melville は、「人間の魂の探求、その生得の悪についての関心、正しいものへの飽くことのない追求を示していることで、きわめて初期ニュー・イングランドのピューリタンのところがある。しかし……彼等が社会的な良心を欠いていたことと、大きく相違している。」<sup>20</sup> このような Melville の特徴は、当時のフランスの社会的、人道主義的思想によって影響されたとも考えられるが、彼の船乗りとしての体験から得たものであった。

Melville の特徴である人間の魂の善と悪への関心は、彼の初期の作品から、晩年の *Billy Budd* の中にまで見出される。しかし、*Billy Budd* は、初期の作品とは多少異なっているように考えられる。初期の作品においては、主に善と悪との対立が描かれているが、*Billy Budd* においては、人間の善と悪を含む自然さと、社会との関わりが描かれている。即ち、Billy が死に至るまで吃りから解放されなかったように、生きている限り人間は原罪から解放されな

18 *Ibid.*, p. 893.

19 *Ibid.*, p. 900.

20 林 信行『メヴィル研究』(南雲堂, 1974), p. 7.



い。そのような人間を、人間が裁かざるを得ない社会の悲劇性が、*Billy Budd* の中に描かれているのである。

#### 参 考 文 献

- Dew, Marjorie. "The Prudent Captain Vere", *Studies in the Minor and Later Works of Melville*. Ed. by Raymona E. Hull. Transcendental Books, 1970.
- Fogle, Richard Harter. "Billy Budd-Acceptance or Irony", *Twentieth Century Interpretations of Billy Budd*. Ed. by Howard P. Vincent. Prentice-Hall, inc., 1971.
- Hawthorne, Nathaniel. "The Birth-mark", *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*. Vol. X, Ohio State University Press, 1974.
- 林 信行, 『メルヴィル研究』南雲堂, 1974.
- Leyda, Jay. *The Melville Log: A Documentary Life of Herman Melville*. 2 vols. Gordian Press, 1969.
- Melville, Herman. *Selected Writings of Herman Melville*. The Modern Library, 1952.
- Reich, Carles A. "The Tragedy of Justice in *Billy Budd*", *Yale Reviw*, 56 (March 1967), 376-89.
- Stewart, Randall. *Nathniel Hawthorene: A Biography*. Archon Books, 1970.
- Watson, E. L. Grant. "Melville's Testament of Acceptance" *Twentieth Century Interpretations of Billy Budd*. Ed. by Howard P. Vincent. Prentice-Hall, inc., 1971.
- Weir, Charles., Jr. "Malice Reconciled; A Note on Melville's *Billy Budd*", *Critics on Melville*. Ed. by Thomas J. Rountree. University of Miami Press, 1977.